近畿工業は産業廃棄物の処理機械を中心に、近年は金属リサイクル向け加工処理機械事業にも注力する二軸せん断式破砕機メーカーの大手。昨年、本社工場内に「近畿メカノケミカル研究所」を開設し、廃棄物に含まれる有価物質の回収効率化へ向けた研究に着手したほか、室内型の破砕・選別テスト棟を開設するなど積極投資を行っている。さらなる技術開発や事業拡大を加速する和田直哉社長に、今後の事業展開などを聞いた。

近畿工業の事業戦略を聞く

雑品対応の破砕機投入

金属リサイクル技術研究推進

和田 直哉社長

――昨年に設立60周年を迎えた。これまでの事業展開などについて。

「創業時は耐火レンガの金型製作等を行い、高度経済成長期には振動ふるい機といった鉱山用機械を手掛けてきた。これら技術を生かし、土木用大型振動杭打機、さらに一般・産業廃棄物用の破砕・選別機など、製品ライフサイクルの変化に合わせた製品開発や、国内市場の開拓を進めてきた」

――近年は金属リサイクル企業向けの製品開発に注力している。

「きっかけとなったのは大手金属リサイクル企業向けに、廃タイヤの破砕機を納入したこと。また、家電メーカーが立ち上げた家電リサイクル工場へ破砕機等の納入実績も数多くあり、これまで培ってきた破砕・選別技術を用いて、皆さまのお役に立てるよう努力していきたい」

――金属リサイクル関連はどのようなニーズがあるか。また、市場をどう捉えているか。

「これまでごみ処理を中心にリサイクルに携わり、プラントにおける加工の一部を担ってきたが、金属リサイクル業界では『原料』という最終製品を造るための機械が必要になる。そして、業界全体としては歩留まり向上といったさらに精度の高い選別を行い、回収率を高めたいというニーズがあると考えている。精度の高い選別においては、前処理の破砕工程がポイントだと考えている」

「さらに今後は、中国向けが主流となっている工業系雑品スクラップについて、国内で処理できないかというニーズもある。今夏をめどに、工業系雑品スクラップの処理に対応できる、より金属リサイクルに特化した横型・縦型のシュレッダーを市場投入する計画だ」

――海外展開などは検討しているか。

「昨年は中国向けの営業にも注力して実績もできたが、ローカル品と厳しい価格競争となるケースが多く、契約や回収、保証におけるリスク管理やメンテナンス対応の難しさなど、細心の注意を払う必要があると感じた。中国の大きな市場は魅力的だが、同時に東南アジア市場にも目を向ける必要がある。ローカルメーカーと価格競争するのではなく、市場を見極めて中国を含めたアジアへ向けては、新製品・新技術を持ち込んでいきたい」

――研究所も開設するなど、将来へ向けたさまざまな取り組みも着手している。

「工場内に昨年開設した近畿メカノケミカル研究所では、現在7人の専属研究員がおり、機械的要素と化学反応を組み合わせて、より高度な金属リサイクル・回収技術等の研究を行っている。今後もより先を見据えた研究を進めていきたい」

――技術開発と同時に、社員教育や顧客サポートにも力を入れている。

「新入社員は1年間、文系・理系に関係なく、サービスや加工技術など専用のカリキュラムを受けてから配属となる。本社工場には教育棟も設置している。また、入社10年目前後の社員に対しても、大学でさまざまな講義を受けることができるようなプログラムも策定した」

「また、社員教育の充実化のほか、『お客様サポート部』といった、他社にはない体制を構築している。製品を作るだけではなく、部品の注文や油圧ユニットのメンテナンスなど自社で対応しており、部品によっては自社で代替品を製造することも可能だ。細かなニーズにも対応するためのシステムやノウハウは、金属リサイクル事業において強みになると考えている。金属リサイクル市場は当社にとっての新たな市場だが、社是に『流行先取』とあるように、努力と創造でビジネスを開拓していきたい」

（早間　大吾）